GIOVANNI BOCCACCIO
DER
DECAMERONE

著オチカッボ

ンロメカデ

譯平草田森

版出社潮新

世界文學全集(2)
デカメロン
第三十六回配本

非賣品

昭和五年四月五日印刷
昭和五年四月十二日發行

飜譯者　森田草平
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町
發行所　新潮社
電話牛込(局)八〇五番
八八八八〇六番
〇〇〇〇七番
九八八番
振替東京　二三、四五〇番

東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

譯者の序

私はジョヴンニ・ボッカチオの作品に就いて何一つ知らない。たゞハインリヒ・コンラッドの獨逸譯によつて「デカメロン」一部を飜譯したから、この一作だけは人一倍精讀したと云へるだけである。

この飜譯は亡友益田國基君が先づ獨逸語譯から日本語に移して、その下譯を傍に置きつゝ、私が又同じ獨逸語譯から譯し直したものである。だから、日本語に移された文章は一字剩さず悉く私の責任であるけれども、そこには益田君の力が加はつてゐることを否定し得ない。そして、獨逸語の讀書力は私よりも益田君の方が遙に優つてゐる。しかし、私の獨逸語の讀書力と雖も、後から讀む際には、前に益田君が犯した不用意の誤譯を發見し訂正する位には十分なものがあると信じてゐる。つまり二人は相補ひ相扶けて共同作業をした。この意味に於て、私どもの「デカメロン」譯は所謂綜合飜譯なるものを一文の懸値なしに、正直に實行したものであることを公言して憚らない。若し綜合飜譯に意味があるとすれば、それは必ずかうして二重の手間と時間を懸けたものでなければならないからである。

この飜譯は最初新潮社の世界文學全集が發表された昭和二年の春から着手して、昭和五年一月末に到つて漸く完了した。その間益田君は二豎に犯されながらも、絕えず病を力めて執筆した。私自身も盲腸炎を病んで三度順天堂へ入院した。そのために譯了の日が遲延して、どの位出版書肆に迷惑を懸けたか知れない。しかも益田君は出版の日を待たずして、とう〳〵本年の正月十三日に易簀した。私としては實に想出の深い飜譯である。

昭和五年三月十八日

森田草平しるす

解説

ジョヴンニ・ボッカチオの生涯は比較的人に知られてゐない、殊にその幼年時代は知られてゐない。ペトラルカの手紙に據ると、西暦千三百十三年に生れたものらしい。千三百〇四年に生れたペトラルカが、その手紙の中で、自分はボッカチオより九歳の年長であると云つてゐるからである。なほ彼の出生地になると、或ひはフローレンスといひ、或ひは巴里といひ、或ひはチェルタルドといひ、諸説區々として、殆ど適歸する所を知らない。ボッカチオ自身はフローレンス人と稱してゐるが、これは單に彼の祖父がフローレンスの市民權を得たからと云ふに過ぎないのである。巴里といふ説は、主として彼の母親が巴里の良家の娘で、巴里に於て彼の父と出會したといふことに根據を置いてゐる。が、今の世に殘る證跡から云へば、斷然チェルタルドを取らざるを得ない。チェルタルドといふは、フローレンスを距ること二十哩、エルザの谿谷にある小さな町又は城廓といつたやうな所で、彼の一家はこの地に若干の土地を所有してゐた。彼の後半生の大部分もこの地で過された。それに彼自身常にボッカチオ・ダ・チェルタルドと署名してゐたものでもあるし、ペトラルカも彼をチェルタルド人と呼んでゐた。その他同時代の人で、彼がチェルタルド生れであることを言明してゐる者もある。

出生地の詮索はこれ位にして置いて、こゝに吾人の注意を惹くのは、彼が私生兒であることである。前にも云つたやうに、父親が巴里に出て、そこで知り合つた母親との間に出來たのがジョヴンニ・ボッカチオであつた。私生兒であつたばかりに、彼は牧師にならうとしても、特に免許狀を貰はなければならなかつたと云はれる。それやこれやで、父親は彼に非常に優しくして、行く〳〵は商人に育て上げようとした。それも父親自らが立派な商人であつたからに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

外ならない。で、早くから或商人の家へ年期奉公に出されたが、そこで過した六年は全く時間の徒費であつたと、彼自身は云つてゐる。それと云ふのも、彼の幼い魂はその時分から既に詩に走つてゐたからで、早くから子供らしい詩作をして、遊び仲間からは詩人と云はれてゐた。

兎に角、父親は子供の文學的趣味に屈服して、幾分でもその趣味に適ふやうにと云ふので、彼を羅馬教の法律の教授の下に送つた。一説に據れば、この教授はダンテの友人ピストイヤのキノといふ人で、有名な學者でもあれば、詩人でもあつたと云はれる。が、いづれにしてもボッカチオに科學的熱情を吹き込むことは出來なかつた。彼は再び六年間を無駄にしたと云つてゐる。

凡そ千三百三十三年頃、ボッカチオはナポリに居を定めて商業に從事してゐた。ナポリに於けるロベルト王の朝廷には、伊太利や佛蘭西の多くの文學者が出入してゐたが、その中にペトラルカも交つてゐた。ボッカチオはまだ親しくペトラルカと相識るには到らなかつたけれども、これ等の詩人達の奇智や婦人連の美しさに活氣づけられ、色どられたロベルト王の明るい朝廷の雰圍氣の中に愉快な數年間を過して、いよ〳〵俗事に拘はるのが厭になつたらしい。その間、偶然にもヴアージルの墓といはれてゐる墓所に詣でて、詩人として立つ決心を定めたとも云はれてゐる。千三百四十一年の復活祭の前夜、サン・ドレンツオの教會に於て、彼は初めてロベルト王の私生兒といはれるマリアに出逢つた。彼は彼女をその創作中にフイアメツタとして不朽にしてゐるのである。彼女を見て、彼の情熱は灼熱し、更にその情熱は彼女に依つてそれに劣らず報いられもした。が、彼女が人妻としての名譽をも義務をも捨てて、彼の求むる情交に身を委ねたのは、程經た後のことである。なほこの女に就いては、諸説紛々として、中には彼女の存在をすら疑ふ者もある。けれども、彼より先に世を去つて、彼の頭に死の瞬間までも忘れ難き存在として殘つてゐたことは爭はれない。

ナポリに滯在中、フィアメッタの勸めに依つて、彼は初めて「フィロコポ」と稱する散文の騎士物語を書いた。この作は後年の彼に値ひしないものだが、兎も角も驅使するに難い伊太利語の散文をあれ程迄にこなしたのは注目すべきだと云はれる。つゞいて「テシデ」といふ叙事詩を書いたが、これは不評判で、散文の長所が詩に患ひしたものと云はれる。彼自身も絶望のあまり全然詩作の筆を擲かうとしたが、ペトラルカの諫止に依つて漸く思ひ留まつたと云ふことである。

千三百四十一年に、彼は老來わが兒の幇助と同居を望んで已まぬ父親の命に應じて、フローレンスに還つて來た。當時のフローレンスは内政上の爭ひのために騷擾を極めてゐた上に、わが家の陰鬱な靜けさは、ナポリの歡樂盡きざる朝廷の空氣に慣れた彼には耐へ得らるべくもなかつた。その上彼は愛するフィアメッタとの離別に、身も世もあらぬ思ひに悶えてゐた。この思慕の情は、わが身を嚙み切る苦しさともなつたが、更に又われとわが身を慰むる唯一のよすがともなつたのである。この時代に生れた作品は「アメトー」(詩と散文と交互に綯ひ交ぜたもの)「ラモロサ・ヴィジオーネ」(一種の遊戯詩)及び「ラモロサ・フィアメッタ」の三つで、その中最後のものはフィアメッタとの關係が如何なるものであつたかを知る唯一の材料でもある。

千三百四十四年、彼は有力な友人の仲介に依つて父の許しを得、再びナポリに戻つて來た。ナポリではロベルト王の孫女ジョヴンナが即位してゐた。彼女は若く美しく、その上詩人を愛し詩人の稱讃を好んだ。で、ボッカチオはその文學的名聲の蔭に隱れて、彼女の特別な優遇に與かつた。その後、長年の間、彼女は彼の忠實な友であり、彼も亦心からなる尊崇を彼女に捧げてゐた。彼女が良人の暗殺を唆し、少なくともそれを默許したといふ嫌疑を懸けられ、その罪狀が極めて明白になつた時でさへ、彼はなほ僅少の人々と共に彼女の味方に立つて、彼女の汚名を雪がんために計畫したものであつた。「デカメロン」の執筆(千三百四十四年より千三百五十年に亙る)も、フィアメッタと云ふよ

りは、寧ろ彼女の希望に基いて取り懸つたものである。

千三百五十年父の死に依つて、彼はフローレンスに歸ると共に、父の遺志に依つて弟ヤコポの保護者となつた。彼は又非常な優遇を受けて、フローレンスの共和政府に仕へ、重命を帶びて諸方に使ひした。この間に羅馬法王を始めとして、諸國の皇帝王侯とも相識るに到つたのである。が、彼はダンテやペトラルカと同じ意味に於ての政治家では決してなかつた。世知に長けた人として、王侯貴人との社交を種々な意味に於て享樂したに止まるので、フローレンス州の動搖なぞには、何等關心する所がなかつた。彼が外交家としての經歷に於て特筆すべき唯一の收穫は、ペトラルカの交友を得たことである。

この二人の偉大なる詩人の最初の面識は、千三百五十年ペトラルカが暫くフローレンスに逗留した間、その滯在を愉快ならしめようと、ボッカチオの斡旋これ力めた時に始まる。その後も、日を經るにつれて、二人の交遊は益々その親密の度を加へ、翌年フローレンス人が新設の大學に當時名聲の高かつた人々を招聘せんとした時も、ボッカチオは極力その最も重要なる地位をペトラルカに與へんことを力說した。かうして二人の親交は死に到るまで續いた。しかもその交遊の根柢には、共通の趣味と文學的探究があつたのである。

十四世紀の間、古代文學の研究は伊太利に於ても全然等閑に附されてゐた。そして、古典の歷史や詩集は僧侶の手に託されて、それを使用研究することは勿論、その保存さへ覺束ない有樣であつた。ボッカチオは有名なモンテ・カジノの僧院の圖書館を訪れて、戸もなき書室に塵に埋もれた高價な寫本を見、その寫本の頁が引千斷られて、子供の讃美歌だの女の護符だのになつて行く實情を知つて、公然その無智を離ずると共に、自らそれ等の古書を寫し取つて、十五世紀前半の有名な伊太利の學者達を稗益する所が極めて多かつた。一方彼は崇高なるダンテの稱揚に寧日なく、その作品を自ら寫し取つたものであつた。

かくして次に現はれ來つたものが「デカメロン」である。この作は或意味に於て歐洲に於ける散文小說の起原となつたもので、一般に「伊太利散文の父」と稱ばれてゐる。その文體は伊太利人のやうに優美で捲め易く、粗野なシニズムから絕望の戀の溜息に到るまで、あらゆる感情の陰影を表はすことが出來る。凡ての國語に於ける革命と同じく、要するにこれも「自然に還つた」もので、伊太利人の特徵たる表現の直截を具體化したものとも云はれよう。その結果、概念に於ても表現に於ても、時として粗野と猥褻に流るゝ嫌ひあることを免れない。特にこの作中下等社會の題材を取扱つたものの場合に於て然りである。同時に又さう云ふ社會の描寫には素晴らしいものがあつて、通俗の談話にユーモアを交へ、道德上嫌惡すべきやうな場合にも、讀者をして破顏一笑せしめるだけの力がある。

題材は高尙なペーソスから卑野な猥談に到るまで、あらゆる方面からあらゆる材料を取つて來てゐる。但し貞婦グリセルダの話(十日目第十話)といふやうな、道德的にも美しい話が載せてあるからと云つて、作中の卑猥な部分をすつかり帳消しにするわけには行かない。隨分猥談のための猥談といふやうな話も少なくないのである。が、これはどうも南歐人の直截な、包み隱しのない、奔放で情熱的な性情から來てゐるのだから仕方がない。この國民的性情を呑み込んで讀んで行きさへすれば、その思ひ切つて露骨でナイーフな男女關係の物語も、わが國の作品に間々見られるやうな、思はせ振りな性慾描寫よりも、却て挑發的な要素が少ない。それはそれとして、たゞ面白く笑つて讀了することが出來るやうに思ふのは、單に私一人の僻目であらうか。私としては飽くまで、この作の時代を帶びた、粗枝大葉の直截な文體なり描寫なりが作中の卑猥な要素を救つてゐるものだと信ずるものである。

なほ、この作が卑猥であるといふ非難を避けるために、强ひてこの作を諷刺と皮肉を主としたもののやうに見做さうとする人々もある。實際、この作の中には、羅馬敎會、特にその僧侶の墮落腐敗に對する辛辣な諷刺と攻擊が多きを占めて、例の卑猥な物語と殆ど對立をなすものと云つてもいゝ。が、それはたゞ對立をなすと云ふに止まつて、一

方が他方を蔽ふことにはならない。それに、その皮肉も、現在から見ればそれ程根本的なものとも思はれない。作者が晩年その態度を悔いて、再び教會に歸依した事實に見ても、凡そその邊の消息は分るのである。私は寧ろこの作者を感情的な弱い人だと思ふ。昂奮して、詩作の筆を燒かうとした一事から見ても、そこに愛すべき弱者の面影が見えるではないか。

前にも云つたやうに、この作は歐洲に於ける散文小說の濫觴をなすものだと云はれてゐる。が、それだけに又テクニックの上から見れば、隨分幼稚なものだと云はざるを得ない。大抵の話が長篇小說の筋書のやうなものに留まつてゐる。が、流石に天才者の筆になつたものだけあつて、その中には現在のテクニックから見て、立派に短篇小說の體を具へたものもないことはない。が、さう云ふ藝術的に見て價値のある作、殊に場面の活躍した描寫と云つたやうなものは、いづれも下等社會の實相を寫した、所謂卑猥な作品の中に多いのだから困る。その中にあつて、たゞ一つこれなら藝術的に見ても價値がある上に、何處から見ても卑猥でないと思つたのは、五日目の第九話に出る鷹の話である。人々の思ひ〳〵ではあるが、私はこの作を「デカメロン」百話の中の第一の傑作だと思ふ。少なくとも一般に推稱されるグリセルダの話などよりは、何の位佳いか知れない。と云つて、この作にも未だ性格らしい性格もなければ、背景らしい背景もない。が、この作にはちやんと焦點がある。謂ふ所のクルーシャル・モメントがあつて、それに全體の重量がかゝつてゐるから、讀んでゐて息も繼がれない面白味がある。立派な短篇小說でもあるが、書き直せば、すぐに近代的な一幕物にもなる。實際、私は飜譯しながら、いつか折があつたら、この材料に暗示を得た一幕物を書いて見ようかとも考へたものだ。處が、その後になつて、エミール・ゾラの「ジュヴェナール」を讀んで見ると、ちやんとこの話がエピソードとして作中の要所に使はれてゐる。たゞボッカチオが鷹を料理して喰はせるのに對して、ゾラは愛猫を料理して作中の主人公に喰はせる相違があるばかりだ。しかも、その使ひ方が實に換骨脫胎の妙を極めてゐる

のである。私はがつかりして筆を投じた。

序ながら、「デカメロン」の案を粉本としたり、若しくはその一部を材料として採用した人々には、ゾラの外に、なほ獨逸のレツシング（「賢人ナターン」の中に一日目の第三話を取る）、英吉利のチョーサア、リドゲート、ドライデン、キーツ、テニソン等の大きな名前をいくらも擧げることが出來る。が、面白いことには、ボツカチオ自身も佛蘭西の批評家によつて、佛蘭西古代の物語を剽竊したと非難されてゐることである。剽竊か剽竊でないかは暫く措くとして、「デカメロン」の中の何れだけが他から材料を取つたもので、何れだけが彼の創意、若しくは經驗に基づくものであるかを檢べて見るのも面白からうと思ふが、私の力に及ぶことでもないから止めて置く。

その後十年の間、彼はフローレンスに定住して、時々外交上の使命を帶び、又は友人を訪問するために市を去ることはあつても、居を移すやうなことはなかつた。一方「デカメロン」は益々上流社會の紳士淑女、しかも相當の見識を有つた年配の人々の間に耽讀せられるやうになつた。

千三百六十年、彼はフローレンスの騷がしい巷から退いて、出生の地チエルタルドに歸臥したものと思はれる。この退隱生活の魅力を、彼は法悅を以て書き綴つてゐる。そして、その翌年彼の生涯に於ける不思議な轉換が起つた。それは、若し彼にして直ちにその不信心な生活や文學的述作から脫却しなければ、必ずや近き將來に於てその死を免れざるべしと、自分の懺悔僧から云ひ聞かされたのであつた。その他、かうした事柄を方々から聞き及ぶに到つて、彼の多感な性質は太く動かされた。實際、彼の生活は奔放不羈なるもので、その作品も屢々道德に背馳してゐた上に神聖な羅馬教會の制度なり僧侶なりを痛烈な諷刺で攻擊して來たことは、一部の「デカメロン」を讀んでも首肯されることである。今や突然の死に脅されて、彼はその藏書を賣り文學を捨て、餘生を懺悔と宗教的修練に送らうと決心した。それに關して、彼はペトラルカに書を送つて悶々の情を訴へてゐるが、それに對するペトラルカの涙に滲む友

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

情を今日なほ吾々は目撃することが出來るのである。この崇高な友情に動かされて更生したボッカチオの晩年の作品が多く宗教的色彩を帶びて來たのも怪しむに足りない。

次の十年間彼は所定めぬ生活をした。が、主としてフローレンスとチエルタルドに居を構へ、ペトラルカその他の友人の訪問や、外交上の使命を帶びて屢々その家を去つた。一面、彼は書籍の購入に多額の金を費したために、常に貧乏をつゞけてゐたらしい。が、その獨立心は非常に旺盛で、彼の友人や嘆美者に依つて提供された數々の非常な好意を決然として斥けてゐた。この間四つの重要な羅甸語の作品を殘してゐる。

千三百七十三年、彼はチエルタルドに於ていたく病魔に冒され、瀕死の狀態に陷つた。そして、その結果から完全に恢復することは出來なかつた。が、病魔と雖も、彼の知的精力を屈服せしめることは出來なかつた。フローレンス人がその大學に「神曲（デイヴイナ・コメデイア）」の講座を設けて、それをボッカチオに提供するや、齡傾ける老詩人は進んでこの至難の仕事を引請けた。その最初の講義は實に千三百七十三年十月二十七日を以て開かれたのである。が、その翌年、無二の親友ペトラルカの死を聞くや、强くその心を打たれ、この打擊は終に癒される時が來なかつた。かくて亡友の記念に必死の努力を捧げ、ペトラルカの養嗣子を指導して、亡き詩人の羅甸語の叙事詩「アフリカ」の出版に盡瘁した。因（ちなみ）に、この作はペトラルカ自身あの有名な「ラウラに與ふるソネツツ」よりも傑作だと信じてゐたものだと云はれる。

かくしてボッカチオにも最後の日が來た。その遺言に依つて、彼の藏書はその懺悔僧に殘され、懺悔僧の死後はフローレンスの修道院サント・スピリトに讓られることになつた。更にその僅かな財產は弟に遺された。千三百七十五年十二月二十一日チエルタルドに於て、先立てる私生兒の後を追つて世を去ると共に、彼の遺骸はその地のサント・ヤコボ及びサント・フイリツポの教會に葬られた。（大部分エンサイクロペデイヤ・ブルタニカに據る。）

第四日……二〇五
第一話……二一一
第二話（略）……二二三
第三話……二二三
第四話……二二八
第五話……二三四
第六話……二三八
第七話……二四六
第八話……二五〇
第九話（略）……二五六
第十話……二五六
第五日……二六九
第一話……二六九
第二話……二八〇
第三話……二八六
第四話（略）……二九四
第五話……二九四
第六話……三〇〇
第七話（略）……三〇六
第八話……三〇六
第九話……三一二
第十話……三一八
第六日……三二三
第一話……三二三
第二話……三二五
第三話……三二九
第四話……三三〇
第五話……三三二
第六話……三三五
第七話（略）……三三七
第八話……三三七
第九話（略）……三三九
第十話……三三九
第七日……三五三
第一話（略）……三五四
第二話（略）……三五四
第三話（略）……三五四
第四話（略）……三五四
第五話（略）……三五四
第六話（略）……三五四

第七話（略）……三五五
第八話（略）……三五五
第九話（略）……三五五
第十話（略）……三五五

第八日……三五六

第一話（略）……三五六
第二話（略）……三五六
第三話……三五六
第四話（略）……三六四
第五話（略）……三六四
第六話……三六五
第七話……三七一
第八話（略）……三九三
第九話……三九三
第十話……四〇九

第九日……四二三

第一話……四二三
第二話……四二八
第三話……四三一
第四話……四三六
第五話……四四〇
第六話……四四八
第七話……四五三
第八話……四五六
第九話……四六〇
第十話……四六五

第十日……四七一

第一話……四七一
第二話……四七四
第三話……四七九
第四話……四八六
第五話……四九三
第六話……四九七
第七話……五〇三
第八話……五一〇
第九話……五一七
第十話……五四四

デカメロン

ボッカチオ作
森田草平譯

第一日

如何なる動機から以下擧ぐるやうな人々が集まつてお互ひにさうした物語をするに至つたかを、一應作者が説明した後で、パムピネアの宰領の下に、各人その最も得意とする所を語る。

淑女方よ、私は貴方方が天性いかに情深くいらせられることを思ふにつけ、この作品が最初の程は貴方方の心にさぞ容易ならぬ、忌はしい印象を與へることであらうと氣遣はれます。と申すのは、近頃、それを見た方は云ふ迄もなく、たゞ話を聞いただけの人達をも哀愁の念に打たれさせずには置かない、あの凄慘な傳染病の慨ましい記事をその冒頭に掲げてゐるからで。が、それだからと云つて、何處迄も悲嘆の涙に暮れて讀み通さねばならぬものだなぞと誤解して、のつけから怖氣を震ひ、飜讀を中止するやうなことのないやうにお願ひして置く。さうした恐ろしい冒頭は、貴方方にとつて、正しく旅人の目の前に聳える嶮岨な山に外ならない。その山の向うには美しく快い平原が横はつてゐて、そこに到る紆餘曲折の勞苦が大きければ大きいだけ、それが旅人達の眼に一層心地よく映るのと同じ理窟ですよ。そして、享樂の飽滿に續いて苦痛の生ずると同じやうに、あの悲慘事も亦、それに續く喜びによつて局を結ばれます。

で、その短い間の悲哀——短いと申しますのは、それが僅々數語に盡きてゐるからで——の後には、直ぐさま上に私のお約束して置いたやうな、悦樂と甘美とが遣つて來るのですが、而もそれは、かやうな冒頭の後では、何かそれに對する明確な證言でもない限り、恐らく何人も期待しないだらうと思はれるやうなものですよ。尤も、私にした處で、もつと他の餘り嶮岨でない道を執つて、最後の目的地へ貴方方を御案内することが出來たら、喜んでそれに就いたことでせう。ですが、かうした前置を省いては、後に皆さんのお讀みになるやうな事柄が何う云ふ風にして起つた

か、それを明かにすることが出來ないので、謂はゞ已むを得ずかうした手法を取つた次第でございます。

さて、主基督の降誕以來千三百四十八年を經過した頃、伊太利隨一の美しい都だと云はれてゐる、あの高雅なフローレンスの市にいとも怖ろしい死の疫病が遣つて參りました。それが天體運行の作用によるのか、それとも我々の罪業に對する正當な怒りとして、神が人間に下し給うたのか、いづれにしても、二三年前東洋に發生して、そこで無數の人間を僵した後、なほ停止せず、次第に蔓延して、到頭この西方の地域迄も禍を蒔き散らしつゝ歩み寄つて來たのでした。

處で、この惡疫に對しては、人間の智慧や分別では如何とも施す術がなかつたのですね。勿論、その處置には手脱りのないやうに、市内はわざ〳〵そのために任命せられた役人の手で幾多の汚物から清められた上、なほ患者の市に潛入することを禁じて、健康者の保護に就いても屢々協議を凝らしたが、更にその效がありませんでした。同樣に、篤信の人達の手で、一度ならず、一絲紊れない行列とか、又はその他の方法で、神に捧げられる祈りも哀願も何の驗を顯はしませんでした。

しかも、前述の年の春の初めに到つて、この疫病は人の魂を銷し又人の眼を蔽はしむる程凄慘な作用を呈し始めました。が、このペストは、東洋のそれとは違つて、鼻の出血が避くべからざる死の徵候となつてあらはれるやうなことはなく、疾病の初期に當つては、男女を問はず、鼠蹊部又は腋窩に一種の腫物を生ずるのを常としました。それが時には普通の林檎位の大きさであるかと思へば、時には又鷄卵大ともなつて、人に依りその數に多少の差はあつたものの、端的にペストの腫物と稱ばれてゐました。で、この腫物は、今も申したやうな鼠蹊部又は腋窩から始まつて、忽ちのうちに處嫌はず他の凡ての五體に蔓延して行くのですね。

が、後にはその症狀が別の經過を取るやうになつて、多くの患者は腕と云はず、腰と云はず、四肢の全部に亙つて黑褐色の斑點を生じました。それも或者は形は大きいが數が少なく、又或者は形は小さいが數が多いといふ風にですね。そして、以前にはあのペストの腫物が不可避的死の的確な前徵であり、只今でも時折はさうした患者を見受けると同じやうに、今やこの斑點はそれが現れた患者にとつて致命的なものでした。

加ふるに、この疫病の治療に對しては、如何なる醫術も藥劑も更に效能がないやうに思はれました。この疾患の性質がさうなのか、それとも醫者達の無知からしてか、（當時は科學的に養成された醫者の外に、少しも醫學上の修業を積まない男女の醫者があつて、醫者の數は非常に多かつたものでした。）この疾病の正しい原因を知ることが出來ず、

從つてそれに對して適當な治療法を施すことが出來なかつたためか、兎も角も快癒するものは極めて稀れで、殆ど凡ての者が、多少の遲速はあつても、前述の徵候が現れてから三日以内に僵れました。しかも大抵熱もなければ、その他の發作もないといふ有樣でした。

このペストは益々猖獗を極めました。と云ふのは、患者との往來によつて、恰度火が近邊にある乾燥した燃料に燃え移るやうに、どん〳〵健康體に傳染して行つたからですね。實際、啻に患者に近寄つたり、若しくはたゞ言葉を交したばかりで、健康體がそれに感染して等しく死の萠芽を身に受けると云ふに止まらないで、患者が一寸使用したか手にしたかした衣服又はその他の物に手を觸れてさへ、もうその疾患が觸つた者に感染するやうに見えた程、この災禍は停止するところを知らなかつたのでございます。

處で、私がこれから云はうとしてゐる事柄は、どうも本當らしく聞えない上に、私にしてからが、これが若し世人の多くや私自身の目擊したことでなければ、いくら信頼するに足る人々の口から聞いたところで、頭から信用する氣にはなれなかつたでせうよ。何しろこの傳染病は、啻に人間から人間に傳染したばかりでなく、一層恐ろしいことには、ペスト患者又は、ペスト死亡者の所持した物品に觸れたものは、如何なる動物と雖も、この病菌に取り憑かれて、瞬くうちにこの疫病のために僵れた程、暴威を振つて傳播して行つたものですからね。かうした現象に就いては、私は一度ならずその實例を見たものだが、特に或日のこと、上に述べたやうに、この眼でそれを目擊したのでした。この疾病で僵れた或貧乏人の襤褸を街路の上に投げ出して置いたところへ、二頭の豚が遣つて來て、最初はこの動物特有の遣り方で、暫く鼻で搔き廻してゐましたが、それから口に咬へてあちこち振り廻したものです。暫く經つと、それが毒でも喰つたやうに痙攣を起して、散々汚したその襤褸の上に打つ倒れたまゝ往生してしまひました。

かう云つたやうな、及びこれに類した、若しくはこれよりも甚しい多くの機緣に促されて、生き殘つてゐる程の者は戰々兢々として種々の豫防策を講ずると共に、誰も彼も皆同じ一つの慘酷な標的に向つて走りました。つまり自分だけが助かりたいといふ一心から、患者並びに患者に附屬した物は、一切これを避け遁れようとしたのですね。

で、二三の人々は、己の生活を節し、凡ての過度を制することに依つて、この疫病に對抗することが出來ようといふ意見でございました。この連中は團體を作つて、自餘の者とは別になつて、病人のゐない家に閉ぢ籠つたまゝ、一緒に暮しました。彼等は此處で上等な食物と、精選された酒とを極めて適宜に攝つて、あらゆる放恣を絕ち、音樂そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com